

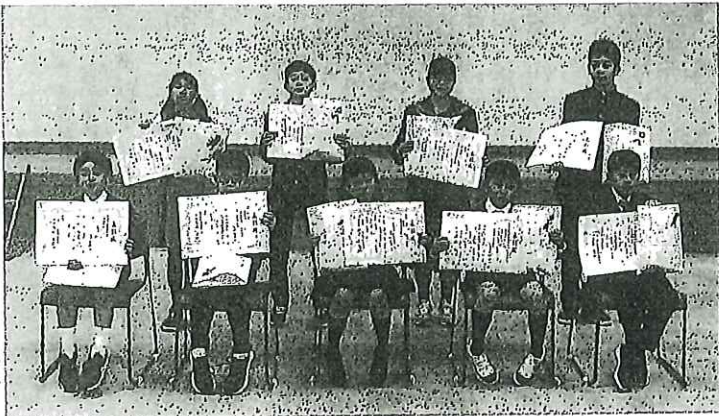
建設工業新聞

11月25日
金曜日

表彰式、展示会を開催

とやま地図作品研究会

日本測量協会



入賞した児童、生徒による記念撮影

国土地理院北陸地方測量部と日本測量協会北陸支部、富山県測量設計業協会の関係者らで構成するボランティア組織「とやま地図作品研究会」(会長・大西宏治富山大学人文学部教授、事務局「日本測量協会北陸支部内」)は23日、第16回「とやまみんなの地図作品展」の優秀地図作品展示会および表彰式を、富山市婦中町の「ファボーレ」で開催した。

式の冒頭、大西会長があいさつし、「作品展は皆さんが学校で使う地図帳に興味を持ち、関心を深める機会

となるよう開催している。新型コロナウイルスは3年目で、地図作成に際しては、かつてのように自由に出版は、いっそう人と触れ合い調査をすることが難しくなってきた。そんな中でも作成に取り組む姿勢に感銘を受けた。小学生の作品は時間をかけた力作がとて多く審査が難しかった」と述べた上で、「地図にはいろんな機能、役割がある。一つは見えない物を見えるようにすること。自分の考えを整理しながら作ることで有益で、自分以外の人に伝えるという重要な役割がある。来年も出展される時は、メッセージを地図に込めることが大切であることを考えてほしい」と話した。



優秀地図作品の展示会開催状況＝ファボーレ

評では、審査委員長の福田哲史氏(元野小中学校校長、元富山市民俗資料館館長)が、「地図は特徴とするポイントを相手に伝えるもので、空間の情報を伝えるコミュニケーションのツール。地図がなると不便。皆さんの作品は実際にあるものをうまく描き、地図になくしてはならないものが整った。人が持つ能力には空間認識能力がある。物の位置と方向、大きさ、形などが素早く正確に分かる力であり、良い地図はこの力がないと出来上がりが良くなり、地図を作ることで算数や数学、理科の力も鍛えられることができる」と強調し、中学生部門の作品2人の優れた点を紹介した。

小学生部門では、審査員で富山県小学校教育研究会社会科部長(富山市立中央小学校校長)の松浦悟氏が、「今年ほどの作品も大変素晴らしい。写真を効果的に使ったり、丁寧に色を塗ったり、きれいに分類し見やすく分けやすかった。今後も相手意識を持った作品に期待している。地図は人の営みの集合体。地図に落とし、表示することで人々の工夫

努力が見えてくる。それを浮き上がらせて、はじめて地図作品と言える。来年は、そんなことにも着目して挑戦してほしい」と講評を述べた。

最後に伊藤部長が、「皆さんの作品は、地域の特徴や身近な生活、環境、文化、歴史、防災などをテーマにいろいろ工夫し、分かりやすく地図に表現して、大変感心した。地図を作るだけでなく、これからの長い人生の中でいろいろなことにチャレンジしてほしい。保護者や先生、関係者のお陰で、工夫された興味深い作品が多く出展された。今後も皆さんの協力をお願いしたい」と閉会のあいさつを話した。

この日は、会場のファボーレと隣そらの広場で、優秀地図作品の展示会も開かれ、家族連れが力作に見入っていた。展示会は27日まで実施している。

16回目の今回は小学生から10校28作品、中学生から1校2作品の応募があり、審査の結果、小学生の部で9作品、中学生の部で2作品が優秀地図作品に選ばれた。このうち、小学生の7点(1月4日から2月19日まで)は市で開催の「富山児童生徒地図優秀作品展」に出展。また、とやま地図作品研究会を受賞した富山市船野小学校5年の黒田凌右さんの作品は国土交通大臣賞、文部科学大臣賞の候補作品として推薦する。

なお、今作品展の支援は国土地理院、県教育委員会、日本測量協会北陸支部、富山県測量設計業協会、日本測量協会、北陸工業新聞社など。